

# これからの場づくりを 考えるための10冊

集まった人びとが新たな関係性を築き、さまざまなプロジェクトが生まれていく。  
そうした豊かな場をデザインしていく必要があるのではないのでしょうか。  
今号の特集の理解を深める10冊を紹介します。



## 6 『コ・デザイン ——デザインすることをみんなの手に』

コ・デザインとは、デザイナーや専門家など限られた人だけでなく、利用者や利害関係者をプロジェクトに積極的に巻き込みながら協働でデザインする取り組みを指す。本書では、なぜ協働が必要なのか、各国の事例をあげながら丁寧に解説。「デザインすることは、実は見えない権力をめぐる政治的な問題」でもあるという言葉が印象に残る。

上平崇仁=著  
NTT出版／2020年



## 7 『政治学者、PTA会長になる』

「街場の民主主義」を唱える政治学者が、身近な自治の場であるPTAの会長となった3年間を記した一冊。本来ボランティアであるはずの活動に、なぜ母親たちが苦しめられなければならないのか。そんな義憤にかられ、改革派としてPTAのスリム化に奮闘する日々が、軽妙な語り口で綴られる。いくつかの挫折を経て、「正論」から「寄り添い」に転じていく、著者自身の変化もおもしろい。

岡田憲治=著  
毎日新聞出版／2022年



## 8 『孤独と居場所の社会学 ——なんでもない“わたし”で生きるには』

安定的な人間関係を築きにくい現代、若者は形から「友だち」になろうとする。石田氏(26頁)の指摘は、社会における「場」の欠如とも関わるものだ。本書は、学校や家族など従来の「場」が変質し「存在証明」を見つけるよう迫られるなかで、誰もが実存的な「居場所」を育てるための身近な方法があることを、多様な視点から教えてくれる。

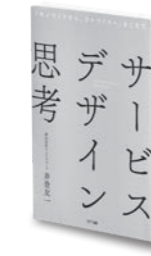
阿比留久美=著  
大和書房／2022年



## 9 『サービスデザイン思考 ——「モノづくりから、コトづくりへ」をこえて』

サービスデザインとは、「顧客が自覚していないレベルのニーズや欲求に対して、共創関係のもと価値を提案し、持続的な関係を継続できる仕組みを持った製品・サービスを創りだすこと」とし、その具体的な方法論を展開。顧客の心の声を引き出すリサーチ手法、ペルソナづくり方など、すぐにビジネスに活用できるメソッドも紹介している。

井登友一=著  
NTT出版／2022年



## 10 『社会的共通資本』

日本を代表する経済学者、宇沢弘文が提唱した「社会的共通資本」。森や川といった自然環境や道路や電気などの社会インフラ、文化や医療をはじめとした制度資本を、人びとの生活基盤を支える共有財産と捉え、それらの維持管理が社会の豊かさにつながる。本書で展開したこの理論は多くの領域に影響を与え、佐々木氏(20頁)の文化的commonsのガバナンス論の基盤にもなっている。

宇沢弘文=著  
岩波書店／2000年



## 1 『黒板とワイン ——もう一つの学び場「三田の家」』

坂倉氏との対談(2頁)で話題となった「芝の家」の原点となる「三田の家」。本書は、その誕生から8年間の活動を、参加した大学教員・学生、商店街関係者などの証言と記録で綴るドキュメント集。大学と地域の交流に始まる「場」の生成と日々の試行錯誤を辿ることで、場づくりの要諦「しつらえ」「きりもり」「くわだて」が実感できる。

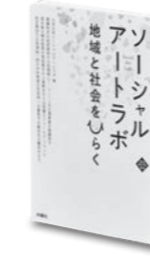
熊倉敬聡、望月良一、長田進ほか=編著  
慶應義塾大学出版会／2010年



## 2 『ソーシャルアートラボ ——地域と社会をひらく』

坂倉氏(2頁)が言及した「アーツケープ」。その中心にいた小山田徹氏への取材や各地の事例から、本書は、「場づくり」の核を成す「アート」の役割を考えていく。単なる展示物を超え、地域の持続可能性、人と人、自然との新たな関係性を生む「プロジェクト中心民主主義」の起点として、社会と協働するアートの秘めた力が発見できる一冊だ。

九州大学ソーシャルアートラボ=編  
水曜社／2018年



## 3 『日々の政治 ——ソーシャルイノベーションをもたらすデザイン文化』

川地氏らの鼎談(8頁)で言及されたマンズイーニ思想、「ライフプロジェクト」による真の民主主義実現へ。本書はその理論と実践を知る“はじめの一歩”。誰もが人生を自ら選択する価値を説き、日々の暮らしと人生のデザインを通じたソーシャルイノベーション実現への道筋を描く。身近な「場づくり」が秘めた可能性に、希望が湧く一冊だ。

エツィオ・マンズイーニ=著 安西洋之、八重樫文=訳  
ビー・エヌ・エヌ新社／2020年



## 4 『ココちよい近さがまちを変える ——ケアとデジタルによる近接のデザイン』

コロナ禍を経て、人類が再認識した「近くにいること」の大切さを起点に、“Livable Proximity(心地よい近さ=近接)”の価値を説くマンズイーニ思想の「現在地」。関係の近接や近接の多様化といった視点から、デジタル技術の援用も踏まえた「ケアする都市」という新たなcommonsの形は、これからの「場づくり」を考える大きなヒントになるはずだ。

エツィオ・マンズイーニ=著 安西洋之ほか=訳・解説  
Xデザイン出版／2023年



## 5 『「地区の家」と「屋根のある広場」 ——イタリア発・公共建築のつくりかた』

互いをケアするためのコミュニティスペース「地区の家」と、地域の知を通じて関係性を育む公共図書館「屋根のある広場」。少子高齢化、格差、孤立といった課題に対応するため、地域の人びとをつなぐための場として機能する新しい公共建築のあり方が示される。本書で紹介される6つの具体的な事例は、“活きた場”を育むための示唆に富む。

小篠隆生・小松尚=共著  
鹿島出版会／2018年

